頭伊豫局調進擣餅之木臼幷木杵、今日舂之謂幸著、倭俗得幸謂幸著福著、幸著之著與擣餅之擣倭語相同、故相混舂斯餅稱祥著、其舂之人敷裳於臼下、舂之時有所口誦之歌、凡祝今日者、猪性多產子、故亥月亥日祝之、而祈子孫繁榮者也、有女子者特祝之、此月三旬之間、亥日有三則始用小團餅、幷鴨脚、忍草、第二箇度用小團餅、幷菊花、忍草、第三箇度用小團餅、幷楓葉、忍草、又餅有各色、所賜典侍方者、用黑色餅、內侍方用白色餅、其以下用赤色餅、所賜諸家者又有其差也、團餅幷草葉、相共以白紙裹之、以黑白水引結之、載小倍木、又別鴨脚葉一枚記所頒賜之諸家交名、而插所結之水引間、始自女中到諸家各拜戴之、

〔鹽尻九十〕十月亥日、朝廷御嚴重に、供御所より舂形を調進す、これをツクツクと稱す、

神無月しぐれの雨のあしごとにわがおもふ事かなへつく〳〵、此歌を誦し給ふとかや、是もまた民のわざをしろしめすありさまなるべし、

〔攝津名所圖會能勢〕御玄猪餅調貢又御嚴重、玄猪餅、能勢餅ともいふ、能勢郡木代村切畑村より、毎歳十月に調貢し奉る、上亥日木代五戸より貢す、中亥日切畑八戸より貢す、若下亥日ある年は切畑八戸の內四戸より貢す、むかしは村長門大夫より調貢し奉る、元弘、建武、康安、應永年間の國宣あり、○中略

能勢餅製造當家の四壁に齋竹を立て、家宅を清め新菰を布、燧して先赤小豆を能煮て餅米を白精、甑にて蒸、赤小豆に交て舂粘す、事數十返也、製造の役人はみな〳〵袴を著し、覆面して餅米となす、其色薄紅なり、これ豕の肉を表したるとぞ、長さ六寸五分、幅四寸、深サ貳寸の筐に入、赤小豆の煮汁を上に引、其上に栗を切て、これを六ツ計程よく並べ置、又其上に熊笹の葉二枚を覆ひ、此如く幾重ねも重ね、都て年々少々の增減あれども、凡貳百合計也、筐の數は、例年御所より仰出さる也、これを唐櫃に藏め、錠に封印をつけ、注連を張、白幣を指、御用の御會符毎年頂戴してこれを立、淨衣を著する者荷ひ、壹荷に貳人宛、都て三荷、宰領の役人帶刀にて守護し、亥日前々日の夜半に里を出、山路嶮しき道を御紋の挑灯照らし、丹州龜山の驛より、公役の人足にて、例年の定刻亥日の前日未の刻、禁裏へ參著し奉る、其時御料理御酒を賜ひ、下行として米三十俵拜賜とぞ聞へし、

〔貞丈雜記六飲食〕一能勢餅の事、古京都將軍の御代、毎年八幡の善法寺より、十月亥の日ごとに、能勢餅を獻上しける由、年中恒例記、殿中申次記等にみえたり、此餅今に絕ず禁裏へ獻上する也、攝津の國能勢郡木代村は、大阪の天滿と云所より、七里北の方なり、其村に數代居住して、其名